

「胃と腸ハンドブック」

「胃と腸」編集委員会 編集

東京慈恵会医科大学教授・第2外科

青 木 照 明

食道・胃・腸を中心とした、消化器の見事な形態診断学の集大成である。わが国で消化器病学に携わる医師なら、少なくとも月刊雑誌「胃と腸」を知らぬものはいないであろう。本書はまさにその26年間の「胃と腸」誌の集大成と言える本である。

1966年(昭和41年)、ちょうど「胃と腸」の創刊号が世に出たころ、私は米国シアトルのワシントン州立大学附属病院で臨床病理学の2年間のコースを修了したところであった。創刊の第1巻1号は1966年4月であるが、米国に第1号が届いたのは夏休みごろであったろうか、7、8月ごろであったと思う。頁を開いたところに増田論文・崎田論文の美しい内視鏡カラー写真が載っており、早期胃癌研究会代表村上忠重先生の創刊の辞が載っていた。しかし私が覚えているのはそのせいばかりではなかった。当時私と病理を一緒に勉強してきた外国の友人が、英文のサマリーと英文 figure, table legends のついた「胃と腸」を私に示して(その当時、日本から送られてくる雑誌としては珍しく、「胃と腸」は上質の紙を用いていた)、白壁彦夫先生の早期胃癌に関するレントゲン診断における「早期胃癌」“early gastric cancer”の分類について熱心に質問されたのである。早期“early”とリンパ節転移の関係が理解できないと彼にしつこく食い下がられたのを覚えているのである。いずれにしても当時レントゲンによる二重造影法が画期的なものとして米国で受けとめられ、また日本の内視鏡技術に対して感嘆している様子は、私は全く関係のない単なる日本人の医者であっ

たにもかかわらず、鼻が高く感じられたことをよく覚えている。

雑誌「胃と腸」がこの25年間に日本の早期胃癌を含めた消化管の診断学を、世界に紹介してきた役割は計り知れないものがあると私は思う。自然科学の手法としては観察・記録そして分析・検討が極めて重要であるが、わが国の消化器病学はその観察の手法を確立したこと、しかもそれを客観的に評価できる記録法を確立したこと、またそれをもとに分析・検討し、最近では内視鏡による治療にまで発展させてきていることなどは驚異的なものがある。このハンドブックの序説においては消化管X線診断25年間の歩み、消化管内視鏡診断25年間の歩み、そして消化管疾患の肉眼病理、などが記載されている。まさに臨床家が身につけなければならない観察記録法の根底となるべき考え方が示されていることは、このハンドブックが手技手法の本、アトラス的な単なるハンドブックに終わっていない大きなポイントの1つとなっている理由である。

消化管のほかには第II章第4項では、胆膵検査法としてERCPの手技と読影の基礎、あるいは胆膵の超音波内視鏡検査法が入っており、また第III章では、内視鏡治療法として食道静脈瘤硬化療法、消化管止血法、内視鏡的粘膜切除術、レーザー療法、拡張法、乳頭切開術など、いわゆる endoscopic surgery の一部が収録されている。また最後の第IV章には、かなりの頁数を割いて鑑別診断と典型症例という貴重な症例の美しいX線像、内視鏡像、切除標本像、そして病理像が収録され

ており、見るだけでも楽しい本となっている。

以上の内容を持った本書は消化器病学、特に消化管を専攻する消化器病医にとっては、欠かすことのできない座右の書となるであろう。“百聞は一見に如かず”ということわざがある。他方“眼光紙背に徹す”あるいは“こころここにあらざれば見れども見えず……”ということわざもある。これらのことわざは形態学の基本の重要性を示唆する言葉でもあると思う。見る目を養わなければ見えているものが何であるか理解できないであろう。本当の意味で見えているとは言えない。その意味で、「胃と腸ハンドブック」が形態学を学ぶうえで大きな役割を果たすことは明らかである。この見事な「胃と腸ハンドブック」を利用していくうえで、もし1つだけ付け加えさせてもらおうとするなら、形態学を理解していくうえで、その形態を現す事象の背景にある機能・病態生理学も念頭に置きながら各執筆者に触れていたかった点である。しかしそれは高望みしすぎであろうか。あるいは私自身の臨床医としての出発が病理形態学にあり、この見事な形態診断学記録の豪華さに圧倒されたことに対する私のひがみからきているのかも知れない。それらはともかくとして、消化器病医の誰しもが持っていてほしい1冊であることを述べてこの書評を終わりたい。

●A4変型 564頁 図178 写真574
原色図767 1992 定価17,510円(税込)
〒400

—医学書院 刊(☎03-3817-5657)